

平成22年度 病害虫発生予察注意報 第4号

平成23年3月18日
栃木県農業環境指導センター作物名 : トマト(越冬・冬春作型)
病害虫名 : 灰色かび病

- 1 発生予想 発生量 多い
- 2 発生地域 県内全域
- 3 注意報発表の根拠

- (1) 3月の巡回調査におけるトマト灰色かび病の発生状況は、発生ほ場率62.5%(平成32.2%)、発生株率8.8%(平成3.8%)と平年のほぼ2倍の高い数値であり、全県下において越冬作型、冬春作型とも多発している(表1)。
- (2) 本格的にサイド換気ができる時期までは、ハウス内は多湿となりやすいため、灰色かび病菌の増殖に好適な環境にあり、今後も発生が増加する恐れがある(図1)。
- (3) 3月11日の地震に伴う停電によって低温障害を受けており、灰色かび病が発生しやすい条件となっているので一層注意が必要である。

表1 越冬・冬春トマトにおける灰色かび病の発生状況

調査時期	発生ほ場率(%)		発生株率(%)	
	本年	平年	本年	平年
10月	0.0	3.8	0.0	0.1
11月	0.0	0.0	0.0	0.0
12月	4.2	4.5	0.1	0.2
1月	17.4	11.3	0.6	0.9
2月	30.4	19.4	2.4	2.1
3月	62.5	32.2	8.8	3.8

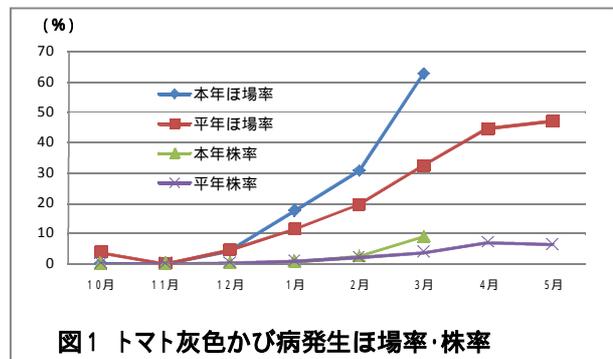


図1 トマト灰色かび病発生ほ場率・株率

4 防除対策

- (1) 灰色かび病の発生しやすい条件は15~23と比較的低温で、多湿条件であることから、ハウス内の温度及び湿度管理に注意する。特に曇雨天日が続く場合は、循環扇、暖房機を稼働し、ハウス内の湿度を下げ、植物体表面の結露を除去する。
- (2) 灰色かび病は腐生性が強いため、発病果実・葉、枯死葉、花びら等は、すみやかに除去し、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- (3) ポトキラー水和剤を使用する場合は、低温条件下では効果が現れにくいので、10以上の温度を確保するよう努める。また本剤は予防剤であるため、発病後は化学農薬中心の防除に切り替える。
- (4) 曇雨天時は液剤の使用を控え、くん煙剤等を使用すると過湿防止に有効である。
- (5) 同一系統薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤とのローテーション散布を行う。

トマト灰色かび病に登録のある農薬例(平成23年3月14日現在の登録状況)

系統名	薬剤名	希釈倍率等	使用時期/使用回数
ベンゾイミダゾール系	ゲッター水和剤	1,000倍~1,500倍	収穫前日まで/5回以内
アズリル [®] リミジン系	フルピカフロアブル	2,000倍~3,000倍	収穫前日まで/4回以内
抗生物質	ホ [®] リオキシAL水溶剤	2,500倍~5,000倍	収穫前日まで/3回以内
ジカホ [®] キニミド系	ロブラールくん煙剤	1	収穫前日まで/3回以内
その他	カンタスト [®] ライフロアブル	1,000倍~1,500倍	収穫前日まで/3回以内
	セ化 [®] ア-フロアブル20	1,000倍~1,500倍	収穫前日まで/3回以内
	ト-トレックス顆粒水和剤	1,000倍~1,500倍	収穫前日まで/3回以内

- 1 くん煙室容積300~400m³(高さ2m、床面積150~200m²)当り100g(50g×2個)
トマト灰色かび病の薬剤感受性検定結果については当センターHPを参照下さい。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpnn.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。
Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成23年度 病害虫発生予察注意報 第1号

平成23年8月22日
栃木県農業環境指導センター

作物名 : いちご

病害虫名 : イチゴ炭疽病 (*Glomerella cingulata*)

イチゴ炭疽病(糸状菌)は、家畜や人に感染する炭疽菌(細菌)とは異なります。

- 1 発生予想 発生量 多い
- 2 発生地域 県内全域
- 3 注意報発表の根拠

- (1) 8月上中旬の巡回調査の結果、発生ほ場率は17.5%(平成4.3%)、発病株率は0.5%(平成0.3%)で、過去10年間で2番目に高い(図1、表1)。
- (2) 平成23年8月19日付け気象庁1か月予報によると、向こう1か月の平均気温は平年並から高い見込みであり、今後の発生増加が予想される。

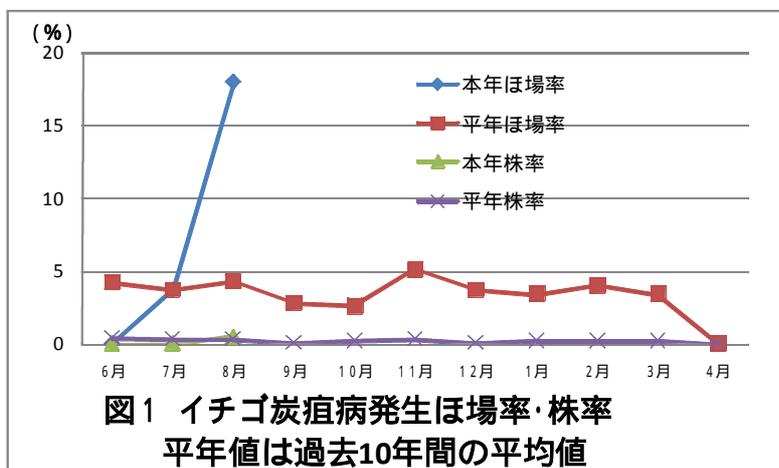


表1 炭疽病発生ほ場率・株率

	ほ場率(%)	株率(%)
H23.8	17.5	0.5
H22.8	20.3	2.0
H21.8	4.2	0.0
H20.8	0.0	0.0
H19.8	0.0	0.0
H18.8	2.4	0.1
H17.8	2.3	0.0
H16.8	11.1	0.3
H15.8	0.0	0.0
H14.8	2.3	0.2
H13.8	0.0	0.0

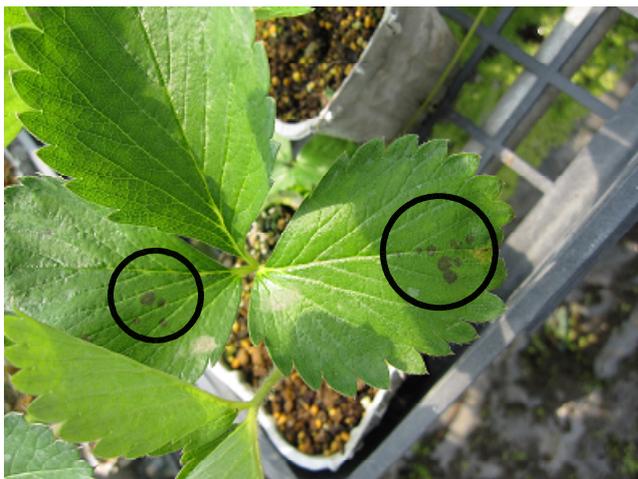


写真1 汚斑状の病徴



写真2 ランナーの病徴

4 防除対策

- (1) 発病株(写真1、2)は、感染源となるので、周辺の株も含めて取り除き、肥料袋等に詰め、空気を排出口をしっかりと閉じて、日当たりのよい野外に放置し、嫌氣的発酵処理を行う(ほ場やその周辺に放置しない)。

- (2) イチゴ炭疽病菌は水滴の飛散等で伝染するので、できるだけ水の跳ね返りがな
いようなかん水を行う。
- (3) ポットの間隔を広げるなどして風通しを良くするとともに、茎葉の濡れ時間が長
くならないよう、かん水はできるだけ晴天日の午前中に行い、曇雨天日及び夕方
のかん水を控える。
- (4) 症状が出てからの防除は困難なので、発生前から定期的に予防散布を行う(表2)。
- (5) 気温が高い時期は、防除の間隔が長くなると感染の危険性が高まるので、7～10
日間隔で防除する。
- (6) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

表2 イチゴ炭疽病に登録のある主な防除薬剤^{注1}

薬 剤 名	希 釈 倍 数	使用時期 / 使用回数
DMI剤 (EBI剤)		
バイコラール水和剤	2,500倍	育苗期 / 3回以内
サンリット水和剤	2,000倍	収穫前日まで / 3回以内
グアニジン系		
ベルコート水和剤	1,000倍	育苗期(定植前) / 5回以内
ベンゾイミダゾール系		
ゲッター水和剤	1,000倍	定植前日まで / 3回以内
有機銅剤		
オキシンドー水和剤80	1,000倍	育苗期 / 3回以内 ^{注2}
キノンドーフロアブル	500～800倍	育苗期 / 3回以内 ^{注2}
有機塩素系		
オーソサイド水和剤80	800倍	収穫30日前まで / 3回以内
その他		
デランフロアブル	1,000倍	育苗期 / 2回以内
微生物農薬		
タフパール ^{注3}	2,000～4,000倍	育苗期～収穫前日まで / -

注1) 平成23年8月16日現在の農林水産消費安全技術センターの農薬登録情報に基づいて作成している。

注2) オキシンドー水和剤80とキノンドーフロアブルの有効成分はいずれも有機銅であるため、両薬剤の使用回数は合わせて3回以内とする。

注3) タフパールは微生物農薬であるため、他の殺菌剤との混用を避ける。

アミスター20フロアブルは、県内で耐性菌の発生が確認されている。

詳しくは、農業環境指導センターまでお問い合わせください。

TEL 028 - 626 - 3086

<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/>